

現代都市論

柴田徳衛 著

東京大学出版会 A 5 版 396頁
1200円

日本的都市の特質を明らかに する

「かつて都市は人類文化の粹、文明の象徴であった。」しかし、「がんらい文明の象徴であったはずの都市が、なぜこのように人々の支配しきれぬ形で膨張し、市民生活をおびやかす、文明を滅ぼそうとしているのか。なぜ市民すべてを幸福にすることができないのか。われわれはいまその事態を見きわめ、その病根をつみとるべき時に立っている。」と著者はいう。そしてその病根を、解明するために、都市の発展を歴史的にとらえる方法をとる。この点について著者は「あとがき」で、「現代都市論」と題しながら過去の歴史を語りすぎたかもしれないと述べているが、問題意識を、現代日本の都市問題にはつきりしぼって、日本の特殊性をとりだす試みは十分成功しているといえる。とくに豊富な資料を駆使して都市の歴史と都市研究史をオーバーラップさせながら説明していく手法は説得力をもつも

のである。

第3章以下は、現代経済と都市、都市形成の諸要因、都市の財政と行政とつづいて、都市論としては一応もれなく触れている。これは、本書が大学の講義をもとにしているからでもあるが、根本的には都市学がすぐれて総合的な学問であり、あらゆる知識を必要とするからであろう。しかもその知識は断片的な寄せ集めでは意味がない。たとえば、水の問題は、水道や水道事業につながると同時に消防・防災とも関係する。また、商工業の発展は公害や交通問題と無縁でないことを考えれば明らかであろう。全体を総合する一つの目が必要なのである。こうした視点はとくに第4章に一貫してみられるものである。

このほか、土地・住宅の経済学的解明に手をつけたことや都市財政に対する分析は、著者の研究を一層すすめたものとして、本書の特徴にかぞえていだろう。最後に著者は、理想都市実現のための基本条件は市民運動の展開と都市研究の推進・総合化にあるとして、国・自治体の都市政策の転換を要求している。この意味においても、大都市自治体の職員にじっくりよんでもらいたい本の一つである。

< I >

あとがき

現在行なっている市行政は多くの問題をかかえています。すなわち、行政のやり方がマンネリズムに流されていないか、新しい行政の工夫がなされているか、行政が効率的に運用されているか、行政にムダがないかと自問してみれば、問題の多様性と所在は明らかでありましょう。にもかかわらず、私たちは日常行政のなかに埋没しがちになっています。

しかし、市民に生き生きとした行政サービスを提供するためには、行政の自己反省をたえず行ない、より良いものへと改善していく努力と工夫がぜひとも必要です。

そこで、今回はこうした観点から、「行政の再点検と提案」と題して特集してみました。行政担当者たる部・課長さんに、実態・問題点・提案を執筆していただき、それに対する外側からの批評として、学識経験者のコメントを加えてみました。

なお、次号も、本号につづいて「行政の再点検と提案」を特集いたします。これを機会に職員の皆さんが行政の再点検をいろいろな角度から行ない、創意にみちた提案が職場でなされることを期待してやみません。< N >

調査季報

15

1967年9月30日

編集・発行——横浜市総務局行政部調査室

横浜市中区港町1-1

印刷——有限会社 宮村印刷所

横浜市南区永楽町2-22